

研究ノート

『摩尼十万語』の基礎的研究 (4)

——第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ (3) ——

Basic Research on the *Maṇi bka' 'bum* (4):

A Translation and Romanization of Selected Passages in Section 8 of Volume I (3)

佐久間留理子*
SAKUMA Ruriko

The *Maṇi bka' 'bum* is a collection of texts concerning Tibetan King Srong btsan sgam po (A. D. 581-649), in which the king is described as the incarnations of the Bodhisattva Avalokiteśvara. This collection is a part of the literature known as “hidden treasure” (gter ma), which is said to have been mysteriously discovered. In fact, The *Maṇi bka' 'bum* was compiled around the fifteenth century in Tibetan Buddhism. The entire *Maṇi bka' 'bum* collections is divided into three sections, namely the “Sūtra section,” and “Sādhana section,” and “Sections of instructions.” This study aims to present a translation and romanization of selected passages in Section 8 of volume 1, included in the “Sādhana section” describing visualization in Esoteric Buddhism.

キーワード：チベット仏教 (Tibetan Buddhism)、ソンツェン・ガンポ (King Srong btsan sgam po)、成就法 (Visualization)

1. はじめに

(1) 研究の目的

チベットの建国王であるとともに、観自在¹の化身として信仰されてきたソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po)(A. D. 581-649)²は、「埋蔵経典」(gter ma) と総称される典籍の一つである『摩尼十万語』(*Maṇi bka' 'bum*) (*MKB*)³を著したと伝えられる。また、それは 12 世紀から 13 世紀にかけて 3 人の経典発掘者 (gter ston) によって発見されたという伝承がある。しかし、実際には 15 世紀頃に、それまで主に口伝で伝承されてきた観自在信仰が現行の形としてまとめられたものであると考えられている⁴。本稿では、インドで成立した観自在信仰が、チベット仏教においてどのように受容され、変容したのかという視点から『摩尼十万語』第 1 巻のセクション 8 の「大悲者の成就法」(thugs rje chen po'i sgrub thabs) に説かれる「真言の輪の修習」の逐語訳とテキストのローマナイズを行う⁵。原典テキストは、プナカ版 (Pu)⁶とデルゲ版 (D)⁷を使用し、和訳に際しては英訳⁸を参照した。

¹ 「観自在」は、玄奘による新訳であり、サンスクリットの名詞「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokiteśvara)に即した訳語である。また、チベット語の「チェンレーシク・ワンチュク」(sryan ras gzigs dbang phyug) もまた、「観自在」に対応する。インド・ネパールでは、「アヴァローキテーシュヴァラ」の別名として、「ローケーシュヴァラ」(世自在) (lokeśvara) がしばしば用いられる。他方、「観世音」という名称も知られるが、それは鳩摩羅什による旧訳で、「世の衆生の救いを求める声を聞いて救いを与える」ことを意味する (速水 2000: 44)。日本においては「観世音」、「観音」とも呼ばれるが、本稿では上述のサンスクリットの名詞やチベット語に対応する「観自在」の名称を用いる。

² (山口 1988: Xiii)。

³ *MKB* は、『摩尼十万語』のチベット語である *Maṇi bka' 'bum* における下線部分の文字を抽出した略号である。本稿では、*MKB* の略号は、『摩尼十万語』のプナカ版木版印刷本とデルゲ版編集本を指す。前者は、Trangyang and Jamyang Samten (1975)によって出版される。後者は、西藏人民出版社から 2013 (2011) 年に『嘛呢全集 (上、下巻)』として出版される。

⁴ (山口 1988: 789; Kapstein 1992: 79-93; 163-169; 石濱 2001: 23 注 26, 223 注 1; 榎殿 2021: 14-17; 谷口 2023: 768)。

⁵ ローマナイズは、将来、本稿で使用したプナカ版の他に、グンタン版・ラサ版等を使用してテキスト校訂を行うための基礎的作業である。

⁶ 略号は、参考文献において説明した。

⁷ 略号は、参考文献において説明した。

⁸ (Trizin Tsering Rinpoche 2007 vol. I: 826-832)。

(2) 先行研究・本研究の新規性

「大悲者の成就法」(MKB, Pu, vol. I, 519, 4-583, 4; D vol. I, 505, 11-546, 19) は、全六章から構成される「大悲者の六輪」(thug rje chen po'i drug skor) (MKB, Pu, vol. I, 494, 5-584, 3; D, vol. I, 488, 16-547, 10) の中の第五章 (Pu, vol. I, 514, 4-583, 4; D, vol. I, 502, 5-546, 19) の一部である。この第五章の各項目は、MKB におけるソンツェン・ガンポ王の伝統による「六字真言成就法」、即ち観自在の「実践指南」(dmar khrid) と呼ばれる実践方法の分科 (Pu, vol. I, 424, 1-438, 3; D, vol. I, 417, 10-426, 15) に見出される。この分科は、槇殿 (2022) によって和訳されているが、第五章は、それよりも内容を詳しく解説する。

MKB に関する先行研究には、以下のものがある。槇殿 (2021a: 215-491) が、『摩尼十万語』第 1 巻セクション 1 第 1-36 章の和訳とテキスト校訂を公表する。また、槇殿 (2021b) は、『摩尼十万語』の如来蔵思想について考察する。さらに、谷口 (2023, 2024) は、仏身説に焦点を当てた研究を行う。他方、佐久間 (2023a) は、『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章の部分訳とテキストのローマナイズを公表する。また、佐久間 (2023b) は、『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章所収の「護法王ソンツェン・ガンポによって著された成就法」の特色について考察する。さらに、佐久間 (2024a) は、第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」における「三昧耶薩埵の輪の修習」の部分訳とテキストのローマナイズを公表する。さらにまた、佐久間 (2024b) は、第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」における核心部分の特色について考察する⁹。さらにまた、佐久間 (2025) は、第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」における「智薩埵の輪の修習」の部分訳とテキストのローマナイズを公表する。

以上のように、本稿で取り上げる「真言輪の念誦・修習」の和訳 (逐語訳) とテキスト校訂は、先行研究では公表されていない。従って、本研究によって新たな基礎的研究を提示することができる。

2. 大悲者の成就法における真言輪の念誦・修習

(1) 大悲者の成就法の内容構成

「大悲者の成就法」は、成就法の前行 (準備的実践の段階) と本行 (本格的実践の段階) に分かれる。この成就法における本尊は、観自在の精髓である六字の呪文 (六字真言)¹⁰「オーム、マニパドメー、フーム」を神格化した六字観自在である。行者は、この本尊との一体化を達成し、それを確固たるものとするために前行と本行とを実践する。以下に示す各項目の番号は筆者が便宜的に付けたものである。各項目の名称については、槇殿 (2022) を参照した。

前行の構成は、次の通りである。

0. 前置き (Pu, vol. I, 519, 4-5; D, vol. I, 505, 11-14)

1. 大悲者の観自在を成就する者に六つ [の特徴] があること (Pu, vol. I, 519, 6-521, 1; D, vol. I, 505, 14-506, 10)
2. 繋がり (縁) を断つことに、六つあること (Pu, vol. I, 521, 1-523, 1; D, vol. I, 506, 11-507, 18)
3. 瞑想に適切な場所を探すことに六つあること (Pu, vol. I, 523, 1-525, 1; D, vol. I, 507, 19-509, 6)
4. 自分自身の必需品・福德の集まりに六つあること (Pu, vol. I, 525, 1-526, 4; D, vol. I, 509, 6-510, 5)
5. 眷属・従者の繋がりに加わることに六つあること (Pu, vol. I, 526, 4-527, 6; D vol. I, 510, 5-511, 3)
6. 成就に障りが生じないために加持¹¹する前行に六つあること (Pu, vol. I, 527, 6-532, 6; D, vol. I, 511, 3-514, 8)

次に、本行の構成は、次の通りである。

⁹ なお、「真言輪の念誦・修習」の概要は、佐久間 (2024b: 328-329) において述べた。

¹⁰ インドにおける六字真言を説く経典として、『カーランダ・ヴユーハ・ストラ』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*) (S; V) が有名である。その最古の写本に 7 世紀初頭のギルギット写本が残されていることから、西北インドにおいて編纂されたものと考えられている (M, p. 7; Studholm, 2002: 12-17)。

¹¹ 「『加持』とは、一般的にいて、聖性の位階のより上のものから下のものへ『聖なる』力を付与することをいう」(立川 2015: 186)。

1. 六輪の観想 (Pu vol. I, 532, 6-562, 6; D vol. I, 514, 9-533, 2, 1)
2. 何を実践するのか (Pu vol. I, 563, 5-565, 6; D vol. I, 534, 1-535, 11)
3. 六つの重要事 (Pu vol. I, 566, 1-571, 3; D vol. I, 535, 12-539, 1)
4. 六中有 (Pu vol. I, 571, 3-577, 2; D vol. I, 539, 2-542, 20)
5. どこで解脱するのか (Pu vol. I, 577, 2-580, 2; D vol. I, 542, 21-544, 18)
6. 六つの不真実 (Pu vol. I, 580, 2-583, 4; D vol. I, 544, 19-546, 19)

以上の中、本行における 1. 「六輪の観想」の構成は、次の通りである。

0. 序 (Pu vol. I, 532, 6-533, 4; D vol. I, 514, 9-17)
1. 三摩耶薩埵の輪の修習 (Pu vol. I, 533, 4-541, 1; D vol. I, 514, 17-519, 10)
2. 智薩埵の輪の修習 (Pu vol. I, 451, 1-546, 4; D vol. I, 519, 10-523, 1)
3. 真言輪の念誦・修習 (Pu vol. I, 546, 4-553, 6; D vol. I, 523, 2-527, 15)
4. 心の空性の輪 (Pu vol. I, 553, 6-558, 4; D vol. I, 527, 15-530, 16)
5. 食物・アムリタの輪 (Pu vol. I, 558, 4-561, 4; D vol. I, 530, 16-532, 14)
6. 恐れのない行道の輪 (Pu vol. I, 561, 4-563, 4; D vol. I, 532, 14-533, 21)

これらの中、本稿では、3. 「真言輪の念誦・修習」を取り上げる。

(2) 真言輪の念誦・修習

1) 概要

[1] 「外的な念誦」では、行者は六字真言「オーム、マニパドメー、フーム」を唱え、その音によって六道の生類の障りを取り除く。[2] 「内的な秘密の真言」では、本質的な姿の本尊である智薩埵と仮の姿の本尊である三摩耶薩埵¹²とを一つにした後、それを分離させる。また、旋火輪のごとく、真言の輪を観想しつつ、それを唱える。その際には、真言を構成する六字は各々、大悲者、大日、金剛薩埵、宝生、阿弥陀、不空成就という諸尊と象徴的に対応させられる。[3] 「ダーキニーによる加持¹³を獲得する方法で唱えること」では、ダーキニーと呼ばれる女神たちが、自他の身口意（身体的活動・言語的活動・心的活動）を加持するのを思念する。その際には、六字は各々、すべての部族、仏ダーキニー、金剛ダーキニー、宝ダーキニー、蓮華ダーキニー、業ダーキニーという諸尊と象徴的に対応させられる。[4] 「師に対する懇願」では、行者は、師、守護神、ダーキニーに対して、身口意によって加持するようお願いする。[5] 「障りを取り除くこと」では、行者は六字真言を唱えて自らの障りを取り除く。[6] 「金剛の念誦」では、行者は、心に六つの種子（六字真言）を明らかにして、心と法性の意味において妨げられずに唱える。

2) 和訳（逐語訳）とローマナイズ

翻訳に際しては語句を補い、それらを斜体で示した。また、内容を整理するため、便宜的にカギ括弧内に番号を記した。さらに、チベット文の句読線（シェー）は、デルゲ版編集本（D）に従った。

[0] 概略

第三、清浄な言葉、真言の輪には六つある。というのは、次の通りである。第一は、外的に経に従って他者のために唱えること、また、第二は、内的な秘密の真言に従って供養と礼拝のために唱えること、第三は、ダーキ

¹² 三摩耶薩埵と智薩埵は、インド中期密教を代表する経典の一つ『初会金剛頂経』にも説かれる（トウッチ、1984, p. 170, 注 17, ロルフ・ギーブルによる訳注）（*STTS* p. 147）。三摩耶薩埵と智薩埵に関する先行研究には、トウッチ（1984）、肥塚（1967）、清水（1977）、奥山（1999）、佐久間（1993）、森（2000）、立川（2004）等がある。

¹³ 「『加持』とは、一般的にあって、聖性の位階のより上のものから下のものへ『聖なる』力を付与することをいう」（立川 2015: 186）。

ニーによる加持を獲得する方法で唱えること、第四は、師に対する懇願であり、母を呼ぶ息子の方法で唱えること、第五は障りを取り除くこと、法を実践する方法で唱えること、また、第六は、金剛の念誦・禅定へ完全な安らぎに心を向ける方法で唱えるのである。

(gsum pa ngag dag pa sngags kyi 'khor lo la drug ste zhes pa/ dang po phyi mdo sde ltar gzhan don du bzlas pa dang/ gnyis pa nang gsang sngags ltar bsnyen sgrub tu bzlas pa dang/ gsum pa mkha' 'gro mas byin rlabs brnga'i tshul du bzlas pa dang/ bzhi pa bla ma¹⁴ la gsol ba gdab¹⁵ pa ma la bu 'bod kyi tshul du bzalas pa dang/ lnga pa sgrib sbyong chos spyod kyi tshul du bzlas pa dang/ drug pa rdo rje'i bzlas pa mnyam bzhag bsam gtan gyi tshul du bzlas pa'o//)

[1] 外的な念誦

第一、外的に経に従って他者のために唱えること、というのは、次の通りである。外的な念誦は、経のとどろく声のごとく、自他の二つのために、障りを取り除くために [Pu 547, 1] 唱える。「オーム、マニ、パドメー、フーム」というのは、「オーム」は五智であり、「マ」は無尽の慈であり、「ニ」は無尽の悲であり、「ペー」は無尽の喜であり、「メー」は無尽の捨であり、「フーム」は、悲と智の无尽の生類の利益であり、偏りなく生類の利益をなすことによって、六字は熟練者が、法螺貝を吹くごとく、大音声のメロディーで魅力的に唱える、というのは、次の通りである。法螺貝を吹く熟練者が息で法螺貝を、人が大きな音声をよく響かせるように、魅力と安定¹⁶を有する。自らの近くにある一切の人々によって聞かれるように唱えるなら、六字の音が満ちることによって、一切の聞く人々の障りが取り除かれることによって、一切の生類の障りが取り除かれるのを思念する、というのは、次の通りである。四無量心の音、特に誰かが聞くとその人の障りが取り除かれる。六道の生類の障りを取り除くのを思念して唱えられるのである。

(dang po phyi¹⁷ mdo sde ltar gzhan don du bzlas pa ni zhes pa/ phyi'i bzlas pa mdo sde'i gsung sgrog pa ltar/ rang gzhan gnyis ka'i don du sgrib pa sbyang ba'i phyr [Pu 547, 1] bzlas te/ om ma ni padme hūm zhes pa/ om ye shes rnam pa lnga/ ma byams¹⁸ pa tshad med pa/ ni snying rje tshad me pa/ pad dga' ba tshad med pa/ med btang snyoms tshad med pa/ hūm thugs rje ye shes kyi¹⁹ 'gro don tshad med pa/ phyogs ris med par sems can gyi don mdzad pas yi ge drug pa/ mkhas pa dung 'bud pa ltar dbyangs skad che la khugs dang bcas par bzlas/ zhes pa dung 'bud mkhas pas/ dbugs kyis dung bus pas skad che la sgra snyan pa ltar/ khugs dang ltengs²⁰ dang bcas pa rang gi nye logs na yod pa thams cad kyis thos par bzlas na/ yi ge drug pa'i sgra gang gis thos pa tham cad kyi sgrib pa 'byang²¹ bas/ 'gro ba rigs drug thams cad kyi sgrib pa byang bar bsam zhes pa/ yi ge drug pa tshad med pa bzhi'i sgras/ sgos gang thos kyi sgrib pa byang/ spyir 'gro ba rigs drug gi sgrib pa byang bar bsams la bzlas pa bya'o//)

[2] 内的な秘密の真言

第二、秘密の真言のごとく、供養と礼拝のために唱える、というのは、次の通りである。秘密の真言の中心として、近づくこと、智薩埵に近づくことがなされる。成就とは、三摩耶薩埵と智薩埵と不二であると成就されることである。智薩埵と三摩耶薩埵とが二つに分かれる、というのは、次の通りである。三摩耶薩埵を大悲者として生起して、智薩埵と不二なるものとして溶かして、その溶けた存在は一つの火において二つに分けるように

¹⁴ D inserts dang lha.

¹⁵ D btab

¹⁶ チベット文には、ltengs (D ldeng) とあるが、意味不明である。英訳 (Trizin Tsering Rinpoche 2007: 827, 1) にある steady に従った。

¹⁷ D om.

¹⁸ D byas

¹⁹ D kyis

²⁰ D ldeng

²¹ D 'byong

分けて、「オーム、マニ、パドメー、フーム」というのは、「オーム」は大悲であり、「マ」は大日であり [Pu 548, 1]、「二」は金剛薩埵であり、「ペー」は宝生であり、「メー」は阿弥陀であり、「フーム」は [D 524, 1] 不空成就なのである。三摩耶薩埵の心臓より、というのは、次の通りである。三摩耶薩埵の心臓の月輪の上に、六字が存し、五種の光が五部族と五智の自性として存する。智薩埵の神の心臓の六字にその光を当てることによって、智薩埵の神の身口意が御喜びになる供物を捧げる、というのは、次の通りである。身体を喜ばせて安楽を有するものとなる。口を喜ばせて最高の味を有するものとなる。意を喜ばせて法性を有するものとなり、光によって喜ばせる供物を捧げるのを思念するのである。近づく、というのは、次の通りである。智薩埵の神が喜ぶことによって、自らに身口意の瞑想が近づくようになることによって、近づく、と言われるのである。

智薩埵の心臓より三摩耶薩埵の心臓に光が当たることによって、というのは、次の通りである。智薩埵の神の心臓の真言の輪の五種の光が、自身である三摩耶薩埵、即ち大悲者として修習するものの心臓の真言の輪に当たることによって、身口意の成就を獲得すると思念する。というのは、次の通りである。身の成就是、身体に喜びが広がり、衰弱がないこと、口の成就是自身に力を起こして空なる声の連なりを断たないことであり、意の成就是、心において、声の連なりが切れることのない明らかな認識を得て、自らの身口意が加持されるのを修習するのである。成就というのは次の通りである。智薩埵の大悲者の [Pu 549, 1] 身口意の成就を自身の三摩耶薩埵の身口意の三つにおいて、こちら（三摩耶薩埵）に完成して獲得することによって成就すると言われるのである。

旋火輪のごとく、真言の輪が遠くに広がり、こちらに広がり、真言の連なりが切れることがなく、というのは、次の通りである。例えば、旋火輪によって連なりが途切れることのない輪のごとく、自身である三摩耶薩埵の心臓より智薩埵の神の心臓に当てる。真言の光を智薩埵の心臓に集めることによって、光の拡散と収斂が途切れることなくなされるのである。丁度、大小の声が笛を吹くようになり、大小の声を唱えるのである、というのは、次の通りである。声の調子は、あまり大き過ぎず、小さ過ぎない。真言のフレーズ（言い回し）は、明瞭であり、適度に笛を吹く、耳に心が広がるごとくになり、魅力と安定²²を有するものとして唱えるのである。

(gnyis pa²³ gsang sngags ltar bsnyen sgrub tu bzlas pa ni zhes pa/ gsang sngags kyi gzhung gis/ bsnyen pa ni/ ye shes pa²⁴ bsnyen pa la²⁵ byal/ sgrub pa ni/ dam tshig pa dang ye shes pa gnyis su med par sgrub pa la bya'o// ye shes sems dpa' dang²⁶ dam tshig sems dpa' gnyis su phye la zhes pa/ dam tshig sems dpa' thugs rje chen por bskyed la/ lha ye shes sems dpa' gnyis su med par bstim nas yod pa de/ mar me gcig la gnyis su phye ba ltar phye la/ om na ni padme hūṃ zhes pa/ om thugs rje chen po/ ma rnam par snang [Pu 548, 1] mdzad/ ni rdo rje sems dpa'/ pad rin chen 'byung ldan/ me snang ba mtha' yas/ hūṃ [D 524, 1] don yod grub pa'o// dam mtshig sems dpa'i thugs ka nas zhes pa/ dam tshig sems dpa'i thugs ka'i zla ba'i dkyil 'khor gyi steng na/ yi ge 'bru drug gnas pa la/ 'od zer rnam pa lnga/ rigs lnga ye shes lnga'i rang bzhin du gnas pa/ lha ye shes sems dpa'i thugs ka'i yig 'bru la phog pas/ sku gsung thugs mnyes pa'i mchod pa phul zhes pa/ sku mnyes te bde ba dang ldan/ gsung mnyes te ro mchog dang ldan/ thugs mnyes te chos nyid dang ldan nas²⁷ 'od zer gyis mnyes pa'i mchod pa phul bar bsam mo// bsnyen pa zhes pa ye shes kyi lha mnyes pas bdag la sku gsung thugs kyi dgongs pa nye bar gyur pas na bsnyen pa zhes bya'o// ye shes sems dpa'i thugs ka nas dam tshig sems pa'i thugs kar phog pas zhes pa/ lha ye shes sems dpa'i thugs ka'i sngags phreng gi 'od zer rnam pa lnga bdag dam tshig pa²⁸ thugs rje chen por bsgoms pa'i thugs ka'i sngags phreng la phog pas/ sku gsung thugs kyi dngos grub thob par bsam mo zhes pa/ sku'i dngos grub lus la bde brgyas shing rgud pa med pa/ gsung gi dngos grub ngag la nus pa thon

²² チベット文には、ltengs (D ldeng) とあるが、意味不明である。英訳 (Trizin Tsering Rinpoche 2007 vol. I: 826) には、明確に訳されていない。同様の表現のある上記の注 16 に従った。

²³ D inserts nang

²⁴ D om.

²⁵ D byas la

²⁶ D om.

²⁷ D pas

²⁸ D la

zhing grag stong rgyun mi 'chad pa/ thugs kyi dngos grub sems la rtogs pa rgyun chad med pa thob nas/ bdag gi lus ngag yid gsum byin gyis brlabs par sgom mo// sgrub pa zhes pa/ ye shes kyi thugs [Pu 549, 1] rje chen po'i sku gsung thugs kyi dngos grub bdag dam tshig sems dpa'i lus ngag yid gsum la tshur grub nas thob pas sgrub²⁹ pa zhes bya'o// mgal me'i 'khor lo bzhin phar 'phro tshur 'phro rgyun mi 'chad par zhes pa dper na mgal me skor bas rgyun 'chad med par 'khor ba ltar/ bdag dam tshig sems dpa'i thugs ka nas lha ye shes sems dpa'i thugs kar phog/ ye shes sems dpa'i thugs kar 'dus pas 'od zer gyi 'phro 'du rgyun mi 'chad par bya'o// skad che chung ran pa gling bu 'bud pa ltar 'gyur dang bcas par bzlas so zhes pa/ skad kyi gdangs ha cang che ba ma yin/ chung ba ma yin pa³⁰ brnga gsal ba/ ran pa gling bu 'bud pa ste³¹/ snyan la yid 'phrog pa ltar 'gyur dang khugs dang³² ltengs³³ dang bcas par bzlas so//)

[3] ダーキニーによる加持を獲得する方法で唱えること

第三、ダーキニーによる秘密の加持、象徴的方法で唱えること、というのは、次の通りである。秘密の念誦は、ダーキニーの象徴的な声の加持を確立する方法で [D 525, 1] 唱える。「オーム、マニ、パドメー、フーム」というのは、「オーム」はすべての部族であり、「マ」は仏ダーキニーであり、「二」は金剛ダーキニーであり、「ペー」は宝ダーキニーであり、「マ」は蓮華ダーキニーであり、「フーム」は業ダーキニーである。光が虹のように心臓のフリーヒより、五色の光が虚空の虹のごとくダーキニーの場所に拡がることによって、というのは、次の通りである。ダーキニーの大なる住処の二十四と [Pu 550, 1] 八大墓地に 五色の光が拡散することによって、いやおうなく引き寄せられる。というのは、次の通りである。ダーキニーが六字真言の光によって自身にいやおうなく乾いた木の葉が風によって通り過ぎるように引き寄せられる。現前の虚空に、というのは、次の通りである。現前の虚空に黒いカラスの群れが飛び始めるのごとく舞い、踊りの姿勢をとってやって来て、ダーキニーたちが自他の身口意の三つを加持するのを思念するのである。というのは、次の通りである。ヨーガ行者自身と他の兄弟と弟子たちは、ダーキニーの身体が踊ることによって、自他の身体が加持される。笑い声と集合と歌と旋律と説法などで加持する。また、ダーキニーの心、完全な無分別の智によって自他の心が加持される。心が喜び輝き無分別であり、歓喜し広がり浄化する等、心において悟るように加持するのである。大きくなる声で、ダマル太鼓を響かせるように唱える、というのは、次の通りである。ダマル太鼓とシンバルとが演奏され、ダンスがなされる。自他の一切を加持するのを思念する。

(gsum pa gsang ba mkha' 'gro mas byin³⁴ rlabs brdo'i³⁵ 'tshul du bzlas pa ni/ zhes pa gsang ba'i bzlas pa/ mkha' 'gro'i brdo skad byin rlabs 'bebs pa'i tshul du [D 525, 1] bzlas pa ni/ om ma ni padme hūm zhes pa/ om thams cad mkha' 'gro'i³⁶ rigs³⁷/ (38-ma sangs rgyas mkha' 'gro/³⁸) ni rdo rje mkha' 'gro/ pad rin chen mkha' 'gro/ me padma mkha' 'gro/ hūm las kyi mkha' 'gro// 'od zer 'za' tshan lta bu thugs ka'i hrīḥ las zhes pa/ thugs ka'i hrīḥ las 'od zer kha dog rnam pa lnga nam mkha'i 'ja' 'tshon lta bu/ mkha' 'gro ma'i gnas su 'phros pas zhes pa/ mkha' 'gro ma'i gnas yul chen po nyi shu rtsa bzhi dang/ dur [Pu 550, 1] khrod chen po'i gnas brgyad du 'phros pas rang dbang med par bkug nas zhes pa/ mkha' 'gro ma yi ge drug ma'i sngags kyi 'od zer gyis/ rang la rang dbang med par shing lo skom po rlung gis bdas pa bzhin du

²⁹ D bsgrub

³⁰ D par

³¹ D de

³² D om.

³³ D ldeng

³⁴ D inserts (…)

³⁵ D brda'i

³⁶ D 'gro

³⁷ D om.

³⁸ D om.

bkug nas/ mdun gyi nam mkha' la zhes pa/ mdun gyi nam mkha' la bya nag mo'i³⁹ khyu 'drogs pa bzhin/ gar dang stangs⁴⁰ stabs mdzad cing byon nas/ bdag gzhan gyi lus ngag yid gsum byin gyis rlob⁴¹ par bsam mo// zhes pa bdag rnal 'byor pa dang/ gzhan mched lcam dang/ slob ma rnams/ mkha' 'gro'i skus gar mdzad pas bdag gzhan gyi lus byin gyis rlob⁴² ste/ 'phar ba dang/ brdebs pa dang/ 'dar ba dang/ 'khrab pa dang/ bro brdung ba dang/ gar byed par byin gyis rlob⁴³ pa dang/ mkha' 'gro mas gsung yi ge drug pa bsgrags pas bdag gzhan gyi ngag byin gyis brlabs te/ ngag rgod⁴⁴ pa dang/ du⁴⁵ ba dang/ glu dang/ dbyangs dang/ chos smra ba la sogs par byin gyis rlob⁴⁶ pa dang/ mkha' 'gro ma'i thugs rnam par ma⁴⁷ rtog pa'i ye shes kyis/ bdag gzhan gyi sems byin gyis brlabs te/ sems bde ba dang/ gsal ba dang/ rtog pa med pa dang/ dga' ba dang/ spro ba dang/ dang sing byed pa la sogs pa sems la rtogs par byin gyis rlob⁴⁸ bo// skad je dra la da ma ru 'khrol ba ltar bzlas zhes pa da ma ru dang/ ting ting shags dkrol/ gar bya/ rang gzhan thams cad byin gyis rlob⁴⁹ par bsam mo//)

[4] 師に対する懇願

第四 [Pu 551, 1]、師と神に対して懇願する。母に対する息子の方法で唱える。というのは、次の通りである。師たちと守護神たちとダーキニーたちに、身口意の三つを、敬ってお願いするであろう。息子が母を呼んで心の底から「はい」というなら、その時、母が飲食を息子に与えるのに等しいように、師、守護尊、ダーキニーの心臓の中央より、師、守護尊、ダーキニーが、お願いをする息子に対して熟慮するのである [D 526, 1]。「オーム、マニ、パドメー、フーム」というのは、次の通りである。「オーム」は、身について懇願する。「マ」は口について懇願する。「ニ」は意について懇願する。「ペー」は福德について懇願する。「メー」は業について懇願する。「フーム」は、身口意の福德と業の一切の加持を集めるのである。心臓のフリーヒより五色の光を広げて、というのは、次の通りである。心臓のフリーヒより、五色の光を広げて、というのは、次の通りである。自ら大悲者であると修習するものの心臓の月輪の上に、白いフリーヒが取り巻いている。それより、白、黄、赤、緑、黒の五色の光が広がり、その光が師、守護尊、ダーキニーに当たって、というのは、次の通りである。現前の虚空に五色の光が広がることによって、師の住処と土地神とダーキニーが住する場において、光が身口意に当たることによって、母が息子に対する愛情を持って考えるがごとく、というのは、次の通りである。母が愛情を有する心で、一人の息子に対して愛情を持って考えるがごとく、現前の虚空にやって来て [Pu 552, 1] というのは、自らの現前の虚空の蓮華座に雲のようにダーキニーがやって来て、自身に加持して障りを断ち、取り除くことを思念して、というのは、次の通りである。自らに懇願する子に対して身口意によって加持するようお願いする。ここに魔と非人の障りと病と苦の障りの一切を取り除くことを思念するのである。調子を有する声によって、タンブーラの演奏のごとく、声の調子を変化させて唱えるのである。というのは、次の通りである。声が耳に響くようになる。声の調子を有するタンブーラを演奏するようになることによって、耳に心地よいもののごとく、身口意への三つの献身によって、望みを有する者によって唱えるのである。

(bzhi pa [Pu 551, 1] bla ma dang lha la gsol ba 'debs pa ma la bu 'bod kyi tshul du bzlas pa ni zhes pa/ bla ma rnams

³⁹ D ma'i

⁴⁰ Pu stang

⁴¹ 正書法では rlobs である。

⁴² 正書法では rlobs である。

⁴³ 正書法では rlobs である。

⁴⁴ D dgod

⁴⁵ 正書法では 'thu である。

⁴⁶ 正書法では rlobs である。

⁴⁷ D mi

⁴⁸ 正書法では rlobs である。

⁴⁹ 正書法では rlobs である。

dang/ yi dam gyi lha rnam dang/ mkha' 'gro ma rnam la lus ngag yid gsum gus pas⁵⁰ gsol ba gdab pa ni/ ma la bus bos pas snying thag pa nas a'o zer na⁵¹ lan ster ba dang 'dra bar/ thugs kyi dkyil nas bla ma yi dam mkha' 'gros gsol ba 'debs pa'i bu la dgongs [D 526, 1] pa'o// om ma ni padme hūm zhes pa/ om sku la gsol ba 'debs/ ma gsung la gsol ba 'debs/ ni thugs la gsol ba 'debs/ pad yon tan la gsol ba 'debs/ me 'phrin las la gsol ba 'debs/ hūm sku gsung thugs yon tan 'phrin las kyi byin rlabs thams cad bsud⁵² do// thugs ka'i hrīh las 'od zer rnam pa lnga 'phros pas zhes pa rang thugs rje chen por bsgoms pa'i thugs ka'i zla ba'i dkyil 'khor gyi steng na hrīh dkar po la yi ge drug pas bskor nas yod pa las/ 'od zer dkar ser dmar sngo nag po lnga 'phros nas/ bla ma yi dam mkha' 'gro la phog pas zhes pa/ mdun gyi nam mkha' la 'phros pas/ bla ma'i bzhugs gnas dang/ ri bo po ta la thugs rje chen po'i bzhugs gnas dang/ zhing skyong dang/ mkha' 'gro ma bzhugs pa'i gnas su/ 'od zer sku gsung thugs la phog pas⁵³/ mas⁵⁴ bu la brtse bar dgongs pa ltar zhes pa/ mas sems gdung ba dang bcas par⁵⁵ bu gcig po la brtse bar dgongs pa ltar mdun gyi nam mkha' la⁵⁶ byon nas [Pu 552, 1] zhes pa rang gi dun gyi nam mkha' la padma'i gdan la sprin stibs⁵⁷ pa ltar byon nas/ bdag la byin gyis rlob⁵⁸ par chad sel bar bsams la zhes pa/ bdag gsol ba 'debs pa'i bu la sku gsung thugs kyis byin gyis brlab tu gsol 'dir 'od bdud dang mi ma yin gyi bar gcod nad dang sdug bsngal gyi bar gcod⁵⁹ thams cad sel bar⁶⁰ bsam mo// skad gdangs dang bcas pas tam bu ra bsgreng ba ltar bsgyur zhing bzlas so zhes pa/ sgra snyan la 'gyur ba gdangs dang bcas pa/ tam bu ra bsgrengs nas bsgyur bas snyan la yid 'phrog pa ltar/ lus ngag yid gsum mos gus gdung ba dang bcas pas bzlas so//)

[5] 障りを取り除くこと

第五、障りを取り除くこと。法を實踐する方法で唱えること。自らの障りを取り除く、身口意の三つへの献身・敬意によって望みをもつ者によって唱えられるのである。他者の集まりを集め、法の実践項目を誦読する方法で唱える。六つの花卉のある蓮華のような舌に、というのは、次の通りである。自ら大悲者として修習した者の舌が、様々な色の六つの花卉のある蓮華であると思念する。その中央にフリーヒを、六つの花卉に六字真言を思念するのである。というのは、次の通りである。「オーム、マニ、バドメー、フォーム」である。「オーム」は身体障りを取り除き、「マ」は口の障りを取り除き、「ニ」は意障りを取り除き、「ペー」は苦悩の障りを取り除き、「メー」は薫習（習慣によって心に染み着いたもの）の障りを取り除き、「フォーム」[D 527, 1] は知られるべきものの障りを取り除く。言葉は、はっきりと発声する方法を有する。というのは、次の通りである。明瞭な真言の種子、中程の発声、低い発声の [Pu 553, 1] 方法を有する。熟練者は、読み、発声するごとく唱えるのである。というのは、次の通りである。読む熟練者が音の高い行い、中間の発声、低い浄らかな方法で発声するように唱えるのである。

(Inga pa sgrib spyong chos spyod kyi tshul du bzlas pa ni zhes pa/ rang gi dgrib sbyong/ lus ngag yid gsum mos gus gdung ba⁶¹ dang bcas pas bzlas so// gzhan gyi tshogs gsog chos spyod klog 'don gyi tshul du bzlas pa ni/ lce padma 'dab ma drug pa la/ zhes pa/ rang thugs rje chen por bsgoms pa'i lce sna tshogs padma 'dab ma drug par bsam/ dbus nu hrīh 'dab ma drug la yi ge drug bsam mo zhes pa/ om ma ni padme hūm/ om lus kyi sgrib pa sbyong/ ma ngag gi sgrib pa sbyong/ ni yid kyi sgrib pa sbyong/ pad nyon mongs pa'i sgrib pa sbyong/ me bag chags kyi sgrib pa sbyong/ hūm [D

⁵⁰ Pu bas

⁵¹ D nas

⁵² 正書法では sdud である。

⁵³ D om.

⁵⁴ D bsams

⁵⁵ D pas

⁵⁶ D om.

⁵⁷ D gtibs

⁵⁸ 正書法では rlobs である。

⁵⁹ D chod

⁶⁰ D om.

⁶¹ Pu bu

527, 1] shes bya'i sgrib pa sbyong/ gsal la ngag pa/ khugs stengs⁶² dang bcas pa⁶³ zhes pa/ brnga gsal/ sngags kyi 'bru dag/ bar gyi khugs/ smad kyi [Pu 553, 1] stengs dang bcas pa mkhas pa klog 'don pa ltar bzlas so zhes pa/ klog mkhas pas stod kyi 'dren/ bar gyi khugs/ smad kyi stengs⁶⁴ dag pas 'don pa ltar bzlas so//)

第六、金剛の念誦。瞑想の完全な安らぎに心に向ける方法で唱えるというのは、次の通りである。金剛の念誦、心の念誦であり、瞑想の完全な安らぎに心に向ける修習において唱える方法であり、身口意の三つの三昧に、というのは、次の通りである。身体の三昧であって、誰かが安楽に住する。口の三昧であって、両唇、舌を自らの場所に置く。意の三昧であって、心をくつろぐ状態に置くのである。意によって唱えて、というのは、次の通りである。六字を意によって唱える。「オーム、マニ、パドメー、フーム」。「オーム」は、心と法性が、戯論より離れること、「マ」は、心と法性が、自ら生ずることである。「ニ」は、心と法性が、自ら輝くことである。「ペー」は、心と法性が、輝き純粹である事、また「メー」は心と法性が、空で輝くこと、また、「フーム」は、心と法性が、確かに浄らかであること、また、無分別の心に存する、というのは、次の通りである。心は、作ることができず、無分別であり、変容せず、自ら輝き、自ら生じ、把握されない。作ることができず、自ら解放され、妨げられず、自ら生じ、まさにそれに存するのである。言葉を話すことは、沈黙の方法によって、名前や言葉を混ぜずに、心の中で明瞭な物として妨げられずに唱える。というのは、次の通りである。通常の言葉やおしゃべりはすべきではない。言葉でないものと本質は混ざっていない。心に六つの種子（六字真言）を明らかにして、心と法性の意味において妨げられずに唱えられるのである。

(drug pa rdo rje'i bzlas pa mnyam bzhag⁶⁵ bsam gtan gyi tshul du bzlas pa ni zhes pa/ rdo rje'i bzlas pa ni/ yid kyi bzlas pa ste/ mnyam bzhag bsam gtan gyi sgom⁶⁶ du bzlas pa'i thabs ni/ lus ngag yid gsum mnyam par bzhag la zhes pa/ lus mnyam par bzhag ste gang bder 'dug// ngag mnyam par bzhag ste mchu zung lce rang sar bzhag/ yid mnyam par bzhag ste sems glod⁶⁷ la bzhag go/ yid kyis bzlas te zhes pa/ yi ge drug pa yid kyis bzlas te/ om ma ni padme hūṃ/ om sems dang chos nyid spros bral dang/ ma sems dang chos nyid rang byung dang/ ni sems dang chos nyid rang gsal dang/ pad sems dang chos nyid gsal dag dang/ me sems dang chos nyid stong gsal dang/ hūṃ sems dang chos nyid ka dag dang/ sems rtog med la bzhag ces pa/ sems ma bcos rtogs med/ ma bsgyur rang gsal/ rang byung 'dzin med/ ma bcos rang grol/ ma bkag rang shar de ka la bzhag go/ ngag smra bcad kyi tshul gyis ming⁶⁸ tshig dang mi bsre bar yid gsal la ma yengs par bzlas zhes pa/ ngag tha mal long gtam mi bya/ ming⁶⁹ tshig dang snying po mi bsre/ yid la yi ge 'bru drug po gsal⁷⁰/ sems chos⁷¹ nyid kyi don la ma yengs par bzlas so//)

【謝辞】

本稿は、2025 年度科学研究費助成事業・基盤研究 (B) (一般)「チベットにおける観音信仰の受容と変容：『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」(課題番号 23K20424) (研究代表者 佐久間留理子) による研究成果の一部である。

⁶² D ldengs. 正書法では stangs である。

⁶³ Pu inserts ...

⁶⁴ D ldengs. 正書法では stangs である。

⁶⁵ D gzhag

⁶⁶ D bsgom

⁶⁷ D klong

⁶⁸ D mi

⁶⁹ D mi

⁷⁰ D inserts la.

⁷¹ D om.

【引用・参考文献】

・一次文献・略号

MKB: *Ma ñi bka' 'bum*

Pu: *A Collection of Rediscovered Teachings Focusing upon the Tutelary Deity Avalokiteśvara (mahākaruṇika)*. vol. I and vol. II. (e and vaṃ). Tranyang and Jamyang Samten (Reproduced), New Delhi, 1975. (プナカ版印刷版)

D: 『嘛呢全集 (上巻)』 (*Ma ñi bka' 'bum*, vol. I) 拉薩: 西藏人民出版社, 2013 (2011). (デルゲ版印刷版編集本)

M: *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍa-vyūha-sūtra*. Ed. Mette, Adelhaid, Indica et Tibetica 29, Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag, 1997.

S: *Kāraṇḍavyūhaḥ*. Ed. Sāmaśrami, Satyabrata. Calcutta, 1872.

STTS: 『初会金剛頂経梵本 (上) SARVA-TATHĀGATA-TATTVA-SAMGRAHAṀ NĀMA MAHĀ-YĀNA-SŪTRAM』堀内寛仁 (ローマ字化・校訂・注記) 高野山大学・密教文化研究所, 1983.

V: *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, Part 1, Buddhist Sanskrit Texts no. 17 (pp. 258-308), Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Vaidya, P. L. (Ed.) 1961.

・二次文献

[日本語文献]

石濱裕美子 (2001) 『チベット仏教世界の歴史的研究』ブッキング

奥山直司 (1989) 「イコンの園へ—バンコル・チョルテン研究序説—」『チベット・曼荼羅の世界』小学館、pp. 131-168.

肥塚隆 (1967) 「瞑想と造形—インド美術における一つの基礎概念—」『南都仏教』20, pp. 60-79.

佐久間留理子 (1993) 「『サーダナ・マーラー』におけるジュニャーナサットヴァとサマヤサットヴァ」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集』(宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会編) 法蔵館、pp. 793-807.

佐久間留理子 (2011) 『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林

佐久間留理子 (2015) 『観音菩薩』春秋社

佐久間留理子 (2023a) 「『摩尼十万語』の基礎的研究 (1) —第 2 部第 44 章の部分訳とテキストのローマナイズ—」『大阪観光大学研究論集』23: pp. 33-43.

佐久間留理子 (2023b) 「『摩尼十万語』の護法王ソンツエン・ガンポによって著された成就法—第 2 巻第 44 章から—」『印度学仏教学研究』72 (1): pp. 346-353.

佐久間留理子 (2024a) 「『摩尼十万語』の基礎的研究 (2) —第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ—」『大阪観光大学研究論集』24: pp. 69-79.

佐久間留理子 (2024b) 「『摩尼十万語』所説『大悲者の成就法』」『印度学仏教学研究』73 (1): 326-333.

佐久間留理子 (2025) 「『摩尼十万語』の基礎的研究 (3) —第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ(2)—」『大阪観光大学研究論集』25: pp. 77-86.

清水乞 (1977) 「インド宗教儀礼と造形—『サーダナ・マーラー』を中心として—」『日本仏教学会年報』43, pp. 59-72.

立川武蔵 (2004) 「マンダラ瞑想法の特質」『印度学仏教学研究』53 (1), pp. 231-236.

立川武蔵 (2015) 『マンダラ観想と密教思想』春秋社

立川武蔵 (2021) 『仏教史』第 1 巻、西日本出版社

田中公明 (1990) 『詳解 河口慧海コレクション: チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社

谷口富士夫 (2023) 「『マニ・カブン』に見られる仏身説の特徴」『印度学仏教学研究』72 (2): pp. 762-768.

谷口富士夫 (2024) 「チベットにおける観音信仰から見た仏身説—『マニ・カブン』の所説を中心として—」『東海佛教』69: pp. 69-80.

- トウッチ・ジュセツベ (1984) 『マンダラの理論と実践』 (ロルフ・ギーブル訳) 平河出版社
- 中村元 (2001) 『広説佛教語大辞典』 東京書籍
- 速水侑 (編) (2000) 『観音信仰事典』 神仏信仰事典シリーズ 4、戎光祥出版
- 槇殿伴子 (2021a) 『チベット建国神話と観自在信仰—『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章を中心に」—』 起心書房
- 槇殿伴子 (2021b) 『『マニ・カンブン』における如来蔵思想』 『印度学仏教学研究』 69 (2): pp. 806-810.
- 槇殿伴子 (2022) 『『マニ・カンブン』における観自在菩薩の「六字真言成就法」: ソンツェンガンポ王の伝統による「実践指南口伝」(dmar khrid zhal gyi gdams pa) : 分科と試訳』 『身延論叢』 27: pp. 1-43.
- 森雅秀 (2000) 「インドにおける成就法と儀礼」 『高野山大学論叢』 35, pp. 23-43.
- 山口瑞鳳 (1988) 『チベット下』 東京大学出版会

[外国語文献]

- Bhattacharyya, Benoytosh (1968b) *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
- Das, Chandra (1983) *Tibetan-English Dictionary (Compact Edition)*. Kyoto: Rinsen Book Company.
- Ehrhard, Franz-Karl (2013) The Royal Print of the *Maṇi Bka'-'bum*: Its Catalogue and Colophon. In *Nepalica-Tibetica: Festgabe for Christoph Cüppers*, Band 1, Franz-Karl Ehrhard & Petra Maurer (ed.) International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 143-172.
- Imaeda, Yoshiro (1979) Note préliminaire sur la formule Oṃ maṇi padme hūṃ dans les manuscrits tibétains de Touen-Houang. In *Contributions aux Études sur Touen-Houang*. Genève-Paris: Librairie Dorz.
- Kapstein, Matthew (1992) Remarks on the *Maṇi bKa'-'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet. In *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*. Goodman, Steven D & Ronald M. Davidson (eds.) Albany, NY: SUNY.
- Mallmann, Marie-Thérèse (1948) *Introduction à l'étude d'Avalokiteśvara*. Annales du Musée Guimet, Bibliothèque d'Étude-Tome Cinquante-Septième, Paris: Civilisation du Sud.
- Schaik, Sam Van (2006) The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in Its Formative Period 900-1400*. pp. 55-72.
- Studholm, Alexander, 2002, *The Origins of Oṃ Maṇipadme Hūṃ: A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. New York: State University of New York Press.
- Trizin Tsering Rinpoche (Trans.) (2007), *Mani kabum*. vol. I, vol. II. Singapore: [s. n.].